

## 「新しい時代のカタチを考える」

(有)ASOBOT 代表取締役 伊藤 剛 氏

日時：平成 20 年 7 月 2 日

会場：セッション杉並

### “主語のある世界”と“主語のない世界”

今日の講演の前半では、僕の活動の具体的な事例をお話するというよりも、僕が普段ど  
ういうことを考えながらものづくりをしているか、そういう視点みたいなことを、皆さん  
がなにかを考える際のきっかけにさせていただきたい、もしくは体感してもらいたいと思っ  
ております。

まず、講演のテーマ「新しい時代のカタチを考える」と言ったとき、私たちが行ってい  
るいろいろなプロジェクトに関係あるものとして、たった一つだけメッセージを挙げると、  
“主語のある世界”ということのを常々言っています。主語のある世界とは何なのか。その  
ヒントとして、反対に“主語のない世界”とはどういうことなのだろうか。これは一つの  
イメージ例として考えてください。たとえば、若い人たちと話をすると、彼らの認識の中  
で共通していることは、日々テレビをつけるとニュースが流れている。そして、世の中の  
ニュースを知れば知るほど、自分と社会との間に境界線が引かれている感覚がある、と言  
うのです。テレビの中、もしくはその向こう側だけに社会があって、自分がいる場所が社  
会だと感じられない。その想像力がなんでつながらないのだろう。それが常々僕が考え  
ていることです。社会と自分との間に存在する距離感をどうやってつなげていくか、それ  
を一つのテーマにしています。

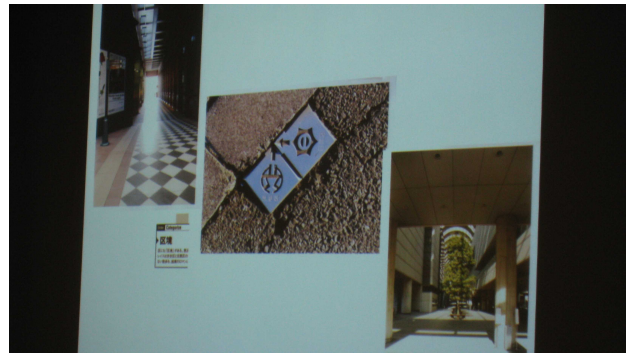
### 普段見慣れているのに“意味”の分からないもの

僕自身が以前に行なった、まちに関する特集企画を紹介します。まち  
について、そもそもどれくらい知っているのだろうと思い、自分の家の  
まわりで見たことがあるけど、実は意味が分からないものを、千五百枚、  
写真に撮ってみるというルールを決めてその企画を行いました。これか  
らいくつか、その写真をお見せします。

例えば、これは道路の上に書いてあるサイン(右図)です。もちろんご  
覧になったことがあると思います。これら一つひとつの意味を僕自身は  
全く分からないので、区役所の道路課の人に話を聞きに行くと“E”は  
電気、“T”は電話、“W”は水道を意味し、要するに、まちの設備の工  
事をしましたよという跡だったということです。これらのサインは、次  
の人が工事をするためにあるそうです。



もう1つのサインは「区界ポイント(右図真ん中)」です。僕は今まで数多く国境を越えてきましたが、あまり区界というものを意識したことがありませんでした。この左上の写真にあるのは恵比寿ガーデンプレイスという場所で、この区界ポイントは、この施設の中にあるのですが、実はこの道の片側が渋谷区で、もう一方は目黒区です。この右下の写真は、新宿の新国立劇場とオペラシティで、これも新宿区と渋谷区の境になるそうです。これを知ったところで僕自身の何かが変わるわけではありませんが、区が違うということは、ゴミの収集日も違いますし、郵便局の配達エリアが、ここできっちり分かれていますね。こういう形で写真を見ていくと、いろんなことに気づかされます。僕たちは、何気なくまちの風景を見ながら歩いています、意外と意味を知らないものがあるのですね。

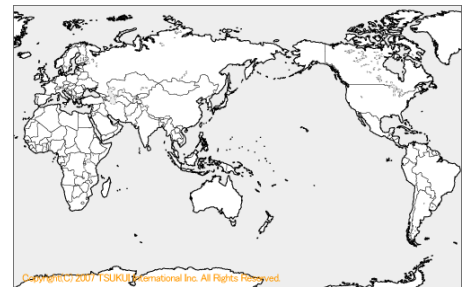


### 「知っている」、その曖昧さを知る

意外と知らないこと、と言っても人によってそれは様々だと思います。僕自身、メディアの仕事をしていますが、身近なことを本当に知らないな、と思い始めています。もっと言えば、知らないということ、どれだけ自覚できるか。それがものを作る上での第一歩だと思います。

これからみなさんに、自分が知っていると思っていることがいかに曖昧であるか、を感じていただきたいと思います。例えば、歩行者用信号の青信号は上か下か？自動車用では右と左のどちらか？これだけ皆さんが普段目にしてしているものなのに、こういうふうに問われると、はっきり覚えていなかったりしますね。

今度は世界地図にしましょう。ロシアとアフリカ大陸、見た目結構ですが、どれくらいの比率に見えますか？仮にアフリカを1とした場合のロシアの面積です。同じくらいだなんて思う方、ロシアの方が大きくなって思う方、さまざまだと思いますが、ロシアの面積は1700万 $\text{km}^2$ という数字になります。これに対して、アフリカ大陸は3000万 $\text{km}^2$ で、むしろ逆です。ロシアが1だとしたら、アフリカ大陸が1.5になります。なぜ、逆のように見え



るかということ、この世界地図がメルカトル図法というもので、経線と緯線が直角になるように作られているため、面積が正確ではないです。実際、上にいけばいくほど広くなるようになっていますし、そのことは学校の授業の中で習っているはずですが、しかし、世界という言葉を知ったり、世界地図を広げようと思うと、この地図が頭の中に思い浮かぶと思います。別に国家権力の意図とか、そういうことは全くないですが、たとえば、災害や飢餓など同じ出来事がロシアとアフリカで同時に起こったとしたら、もしかしたらロシアの方が危機に見えるかも知れない。つまり、僕たちは、国の大きさがこれだけ違うということを考えながら世界地図を眺めたことがないのです。それが非常に面白いと思います。

## 日本語の言葉、その曖昧さ

今度はもっと身近なこと、日本語を考えていきましょう。日本語とは、大きな意味でとらえると、大和言葉という言語を中心に漢字と西洋の言葉をそのまま輸入し、言葉の発音をそのまま受け入れた、かなり特異な言語です。これは他の言語ではあり得ません。

例えば、「この映画はスリルとサスペンスに溢れている」という映画のキャッチコピーを考えてみましょう。特に問われなければ、この映画はスリルとサスペンスに溢れているのだな、そういう映画なのだなと思いますよね。しかし、「サスペンスって何ですか?」と、その言葉だけを切り取ってみると、おそらく皆さん答えられないのではないのでしょうか。ところが、サスペンスという言葉を感じたとしてはとらえている。これが日本人のすごいところなのです。西洋の言葉の場合、その言葉がどのように生まれたかという、語源を定義する辞典があるそうです。なぜ、そこまできちんと定義する必要があるのか。背景には宗教や哲学の問題があるようです。神とは何か、生命とは何か。人によって解釈が違っていると困るわけです。では、このサスペンスという言葉はどうでしょう。ズボンを吊り上げるものをサスペンダーといいますね。つまり何かを浮かせるものの派生語なのです。心を宙づりにして、フワフワさせますよ、というのが語源としてあるそうです。だから、「この映画は、恐怖であなたの心をフワフワさせますよ」というキャッチコピーというわけです。でも、日本人は言葉の意味がここまで厳密に分っていなくても、会話ができています。すごく素晴らしい点である一方、考えなければいけないところでもあります。では、どういうときに問題があるかという事例を今からお出しします。

日本語（漢字）は、ご存じのように象形文字ですから、僕たち日本人は、目に見える文字のイメージを大事にします。それが一番顕著に利用されたのが第二次世界大戦の時です。「侵略」、「退却」、「全滅」。これらは見た目に強い言葉ですよね。そこで、見た目の印象を和らげたいと考えた軍は、「侵略」を「進出」といった具合に、言葉を置き換えていくわけです。そうすると、どんどん言葉の印象が違って見えてきますね。これは戦時中のことで、極端な話だろうと思う方もおられるでしょうが、現在でもありうる話です。たとえば、「値上げ」の代わりに「価格改定」という言葉を使います。「改定」と言われると、ちょっと良いことになったのではないかと勘違いする人もいるでしょう。こういうふうに巧みに言葉を言い換えているだけで、実態は何も変わっていないことが多々あります。こういうふうに、日本人は、言葉をイメージでとらえる傾向があります。

## 言葉とは、“世界の捉え方”を表すもの

ここからはちょっと余談になりますが、ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんという方が日本に来たときに、“もったいない”という言葉を取り上げたことがありました。この言葉はうまく英語に翻訳できなかったので、そのまま“MOTTAINAI”という単語として使用されています。このようにうまく翻訳できない日本語はたくさんありますが、その逆もたくさんあります。例えば、ネイティブアメリカンの言語ですと、“水”という言葉に2つの種類の単語があるそうです。“流れている水”と“止まっている水”です。

また、イヌイットの人たちの使う“雪”という言葉にも“降っている雪”、“水を作るのに持ってきた雪”など同じ雪でも4つの状態を表す単語があるそうです。このような違いが、彼らが生きていく上で、とても重要なことなのです。このように、言葉というものは、世界の捉え方を表しています。

### **あなたの目には、何が“見えて”いますか？**

次に、「百聞は一見にしかず」という言葉がありますが、一見することは、本当に確かなことなのか、皆さんに体感してもらいたいと思います。今からお見せする映像は、黄色いユニフォームの人たちと、黒いユニフォームの人たちがバスケットボールを投げ合うものですが、その際、黄色い人同士が何回パスをしたか、カウントしてください。(ビデオ上映)

正解は11回です。では、黒いユニフォームの人たちに混じって、ゴリラの着ぐるみを来た人が見えた方はいますか？ゴリラが見えなかった方、もう一度よく見てください。

この“見えている”ということについて考えてみましょう。脳というものはいろいろなことを勝手に解釈していきます。バスケットボールを目で追おうとすると、それ以外の情報を脳はシャットアウトします。ですから、ゴリラが見えた人はちょっと視野が広いとも言えますし、集中力がなかったとも言えますね。

次は、同じ形をした二つの人間の絵です。ここに道をつけると、みなさんは、手前にいる人間が大きくて、奥にいる人間が小さいというふうに思いますよね。実は全く同じ大きさなのですが、このように、脳はシチュエーションに合わせて、勝手に解釈をします。

なぜ、このようなことが起こるのか。まず、僕たちが存在しているこの世界は三次元ですが、僕たちが見ている網膜の世界は、全部二次元で写真と一緒にです。目で見た世界を1度二次元に映写して、それを三次元へと脳が一瞬でいろいろなものを補正しているのです。これらの例を通して僕が言いたかったことは、いかに自分が都合に合わせて世界を勝手に作っているかということに自覚してほしいということです。

### **旅をするように日常を生きる**

さて、世界をどのように眺めるかに関しては、もちろんこれに正解はありません。僕の場合には、旅をするように日常を生きていきたいという大きなテーマがあります。皆さんが海外旅行に行かれるとき、旅行先の国について、通貨のレート、経済、治安、娯楽施設といった具合に、いろいろと調べられると思います。そのときには政治のこと、経済のこと、アミューズメントパークのことなどを一緒に並べて考えられるのに、なぜ日本にしていると出来ないのか。それは、自分ではよく知っているはずだと思っているからでしょう。でも、これまで見てきたように、普段何気なく見ているのに意味のわからないものや、知っていると思いこんでいたものが、僕たちのまわりにはたくさんあるようです。僕たちは、この国のことを本当に何も知らないのではないかと。実際に旅をするように、今、目の前にあるものを見つめてみるのが大切だと思います。そうすれば、もっといろいろな事を調べるようになりますし、その中にどうやって入っていくかを考えるのではないのでしょうか。

基本的には、「自分が見えたようにしか世界は見えない」という当たり前のことにどれだけ気づけるかっていうことがとても大きいことだと思っています。それは自己中心的に世界を見るという意味ではありません。社会というものは誰かが作ってくれるもので、言葉の定義も誰かがしてくれるものと思っている限りは、主体的に、そこに自分の存在を実感することができないと思うからです。ただ、旅をしていると、その国では僕はゲストにもかかわらず、自分を中心に動いているように見える。なぜ、それが日本では感じられないのか。やはり、いろいろなことに対して思考が停止しているのだらうなと思うのです。

## 『シブヤ大学』と『ハイジャック会議』

ここには、まちづくり関係者の方もおられると思いますが、僕が講演などによばれる時にみなさんが関心をお持ちになるが、「シブヤ大学」と「ハイジャック会議」の話題です。

「シブヤ大学」は2年前に始めたまちづくりのためのNPO法人です。一般的に大学といわれるものは、どこか場所（会場）を決めて、そこで開催するのが普通ですが、シブヤ大学では人、知恵、もの、それから空間も含めて全部、まちを一つのメディアとして再編集するというのがコンセプトです。例えば、明治神宮であるとか、表参道ヒルズであるとか、そのような様々な場所を、1つずつ学校の教室にしてしまおうという発想です。こういう場所を、毎月第3土曜日に10か所もしくは8か所ぐらい借りて、同時にいろんな授業を行い、その日だけまち全体が大学になります。また、先生が特徴的で、外から招くこともありますが、基本的にはまちの人たちが先生になります。彼らが持っている知恵そのものを再編集したいと思ったからです。例えば、ゴミの分別に詳しい女性がいたとしても、まちの集会所みたいなところなら、そういうノウハウを共有できるかもしれませんが、若い人は絶対聞かないでしょう。そこで、極端な話ですが表参道ヒルズで講義をしてもらいます。まちのいろいろな人たちが持っている知恵を、まちを活性化させる資源として活用できないかと考えたのです。また、最近取り組んでいて面白いと思うのは、キャンパスマップです。例えばまちの美味しいカレー屋さんを探すといったフィールドワークをやる授業があるのですが、そこで対象となったお店を“学食”に認定していきます。若い人たちがまちを歩くときは、ほとんど情報誌を見て移動しますが、それでは店の人とコミュニケーションしづらい。そこでシブヤ大学の学食だというフィクションを楽しみながらお店とのコミュニケーションの入り口をつくりたいと思ったのです。

また、“サークル”がどんどん生まれています。1番面白かったサークルが“シブ補”。シブヤ大学の補講サークルです。講義を受けられなかった人に対して、講義を受けた人が変わりに補講する。あるいは、“アウト・オブ・キャンパス”という活動。例えば新潟で雪かきをする若い人が少なくなって困っている。それなら、シブヤ大学の修学旅行で雪かきをしに、若者を連れて行くってことをやったりしています。さらには、小学校の総合学習の時間に、シブヤ大学で行なった授業を一つのメニューとして出張授業する、というプロジェクトも進めています。また、この秋からいくつかの地方に分校もできます。シブヤ大学の名前を広めたいわけではなく、例えば京都なら京都カラスマ大学とか、瀬戸内大学とか、そのまちの人たちが中心になってつくっていく。ただ、シブヤ大学の構想だけを

移植して、最初の半年ぐらいは少し付き添いながら移行していくプロジェクトをやっています。

次に「ハイジャック会議」は、ETIC という N P O 団体から相談を受けたことから始まりました。彼らは、若い人たちに起業家精神を高めてもらうために、15 年前からインターシッップをやってきたそうです。活動を始めた当初のイメージというのは、まちに目を向けさせたい。自分の住んでいるまちにも、おもしろい大人たちが仕事しているってことを、そこに入り込むことで知ってほしい。もう 1 つは大人と付き合うのは意外と面白いことを伝えたい。そこから始まったそうです。でも、今の若い人たちにとっては、インターシッップは就職活動のネタに過ぎず、そんなイメージは全くないでしょう。

そこで、どうすればまちの活性化につながるかということを考えていく中で僕が作ったのが、この「ハイジャック会議」です。「今日この街をハイジャックしようよ！」なんてことを言われたら面白だろうなって勝手にワクワクしたわけです。今、若い学生の人たちと話をしていると、すごく意識が高いことを感じます。ただ、学生なら、世のブームになっていることとは異なる発想で、何かをやってほしい。僕から見て、学生の一番すてきなところは、“何者でもない” ことだと思います。社会に出ると少しずつ何者かになっていくので、言えないことも出てくる。ところがその点、学生は何者でもないから、自由にいろいろなことを言って、僕たち大人を触発してほしいなと思うんです。

若い人が抱える不満というものは、僕には“可能性” だと思えます。例えばおしゃれなカフェがない、まちが汚い、高齢者の元気がない。そんな不満というのは、何かしらそのまちが抱えている課題なのではないか。それをビジネスにするのを僕たち大人と一緒にやってあげればいい。そこで、日本全国の若い人が何に不満を持っているのか、まちをステージに集まってもらって、ただひたすら彼らの不満を集めたいなって思ったのです。そしてそれをどう“可能性” に変えられるか。「ハイジャック会議」はそういう会議を日本全国でやるイベントです。

## 時代のこと、会社のこと

僕たちの会社は、基本的にはものづくりの会社です。それが紙であれ、空間であれ、アイデアであれ、自分たちの時代をどう楽しく出来るかというメッセージを、企業や行政と一緒に作っている会社です。受注だけでやっている仕事でもなく、メーカー的にものを作ったりもしているので、今あるカテゴリーでの説明は難しいですが、ミッションとしては僕の個人的な思いと一緒にです。僕が自分の仲間と最初に立ち上げた会社なので、自分のまちでもいいし、時代でもいいのですが、自分たちにとって楽しいなと思うことを 1 個ずつ作っていきたいと思っています。

人は生まれる時代を選ぶことができません。それなら、自分が生きた時代が一番面白かったなって思って死にたいです。世界を変えるという言葉を使うと人を惹き付けられると思いますが、変えるというよりは、僕は自分の時代を自分で作りたい。一方で将来に対する不安もあります。これから 10 年後はどうなるのか。でも、誰かが変えてくれるのを待つ

てはられない。そういうモチベーションで僕自身は行動しています。